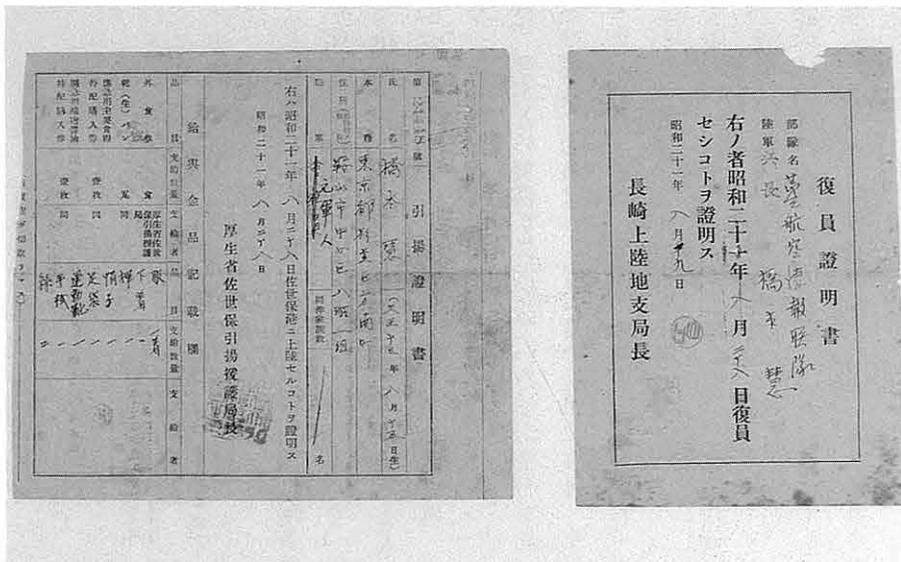


引揚げ



引揚証明・復員証明

〈提供 中川慧さん〉

私の終戦

●成田東五丁目

宮下 春枝

(大正八年生まれ)

昭和一九年ごろ、上海では敗戦の噂が流れていたが、私は信じたくなかった。

戦火が広がり、父や夫は、私たち母子だけでも日本に帰るようにと言われた。そのころは、船便では魚雷の危険があるので北支に廻り朝鮮半島を経ての帰国であった。

一応身の廻りの持ち物の荷作りをはじめたが、幼子四人連れての旅は、どう考えても無理、そして北支に行く列車が、機銃掃射されかなり危険である事がわかった。

どこにいても危険であるなら、家族八人全員、生死をともしする覚悟で帰国を中止する。このことは、後になり残留孤児のニュースが報じられる度に、同年齢の四人の子供を持つ親としては、人事のように思えなかった。

二〇年に入ってからは、日本の大都市ではB29の空襲が烈しくなる。その内にソ連の参戦、広島、長崎に原子爆弾が投下され、ほとんど全滅とのことであった。ラジオから伝わってくるのは、悲観的なニュースばかりで、本当に心細い毎日を過した。こんな歌が、詠まれていた。

「散る桜、残る桜も、散る桜」であった。

まさかと思っていたが、八月一五日の玉音放送に無条件降伏の事実が報じられた時のショックで身が凍る思いで、明日からどんな生活が待っているか、不安ばかりが先行した。

当然、居留民を守っていた陸戦隊や陸海軍の兵士は、武装解除となり、あわれな丸腰となり、治安が心配であった。

四〇年位、日本との貿易を経営していた父の会社であったが、戦火がはげしくなるにつれて、軍の仕事に移行、軍納未買付であった。蘇州、無錫、常州、南京、九江、漢口、南昌と支店が広がり、社員も家族とともに増えていた。

終戦となると、全員取りあえず上海に引揚げ集結の後、日本に帰国の手続きを取り、船便待ちであった。

頼みの食料品燃料の入っている倉庫は、封印されてしまった。全く収入がなくなり、貴金属や衣料品、家具等を処分しての生活であった。

ある日、突然に朝鮮兵士が、一〇人ばかり、銃をつきつけて土足で家の中に入って来た。ピストルを隠しているという

理由で、押入から箆笥の中までかき廻しているが、もちろんあるはずはない。これは各支店の人が、護身用に携帯していたが、終戦と同時に処分している。その時は、恐ろしくて家族全員、部屋の隅でふるえていた。

二、三か月たったところに、日本人は一定の地区に集結されることになり、永年住み慣れた住宅を捨てるように引越した。引越先は、思っていたより安全で、住宅も家族単位で割当てられた。そのうちに小学校程度の塾も開設されて通い、友人も出来た。

私たちの家族は、残留して日本との貿易の再開を待っていた。このような方ばかりが、集結したのであったが……。やつと生活に慣れたある日、父が経済戦犯で逮捕されることが知らされた。大変なことになった。

知人に、有力な方があり、台湾経由で、日本に帰国することが出来たが、無事に日本に着いたかどうか、その頃は不明だった。父を逃がしたという理由で、夫が逮捕された。二週間位で帰宅したが憔悴しきっていた。

ここまで状況が変わって来ると、残留どころではなくなり、引揚げる手続きをとり、荷作りをする。何しろ一人三〇キロの制限があるので、思い出の品物も涙をのんで随分と捨てた。

一二月終わりの引揚であったので、親も子も出来る限り重ね衣をしていたので、税関の人も驚いていた。引揚船は、米軍の上陸用舟艇で、船室はなく船底にむしろが一枚敷いてあるだけで、人間も荷物も一緒であった。

黄色の海から青海原に出て、やっと日本に近づいた時、甲板から美しい緑の山々が見えた。無事に日本に帰国出来たうれしさと、先の見えない生活を考えた時は複雑な気持ちであった。

「国敗れて、山河あり」正にその通りであった。

日本での落着先は石川県小松市で、やっと駅に着いた時、台湾経由で帰国した父が出迎えて下さった。この時の感激は、今も忘れる事が出来ない。

昭和十一年に上海に渡航、日中戦争、太平洋戦争から終戦、引揚と、目まぐるしい一〇年であった。このような体験記は、二度と書きたくない。

地獄の街の初日 はっぴ

●成田東四丁目

山崎 辨

(大正一四年生まれ)

昭和二〇年八月一日。私は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）平壤牡丹江飛行場勤務の少年兵でした。数日後ソ連軍本隊が平壤に進出してきた。ソ連軍に武器を引き渡した我々は、もう単なる男の集団であった。平壤市内から追われた我が部隊は、大同江を渡り飛行場付近の航空廠社宅に移動した。『九月三日までにすべての日本軍将兵は三合里収容所に集まれ』というソ連軍の命令で、私の分隊は九月一日最初のトラックで出発した。広々とした丘に有刺鉄線が張りめぐらされ、その中に無気味なテントが見えた。入口が二つあり、将校と兵士は別々にそこへ入れられた。私はなぜかいやな予感を感じ、入る気がしなかった。いま私たちを乗せてきたトラックは、次の兵士を迎えに引き返そうとしていた。私はとっさに、「忘れもの、忘れものだ！」と叫び、そのトラックに飛乗って、再び本隊に帰ってきた。

九月三日、残っていた将校・兵士は、全部三合里へ出発した。私はみんなと一緒に歩いて行ったが、途中で土手に座りこんで考えた。「逃げろ、ここは日本だ、歩いてでも内地に帰

れる。今だ、逃げるんだ」胸の中で、私はそう叫んでいた。そして私の独りぼっちの逃避行が始まった。私は民間人になりすまして、郊外の日本人社宅に逃げ込んだ。

ある日、日本人の捕虜隊長が一人で社宅にきた。「捕虜仲間」に重病人がいる、替わってもらえないか。要は人数さえ揃えば誰でもいいのだ」といった。「この捕虜グループは、北朝鮮各地で理由なく捕まった民間人で、兵士ではない。近く日本に送還される予定だ」という。私はその病人と入れ替わったが、これが私の運命を大きく狂わせた。結局帰国命令に騙されて満州の延吉に連れていかれたのだ。

延吉六〇四捕虜収容所に連行された、私たち市民大隊（約一〇〇〇人）は、寒々とした武道館に入れられた。床にむしろを敷き、一枚の毛布にくるまって、互いに身体を寄せあって暖をとった。だが、身体が凍りつくほど寒い。朝起きてみると、隣の男が冷たくなっている。死者の衣類はたちまち誰かに剥ぎとられ、発疹チフスとしらみが猖獗した。

その年の大晦日の夕方、私たち市民大隊の一〇〇〇人は、突然収容所から解放され、酷寒零下三〇度の街にほうりだされた。知り合いとて無い異国の街、多くの人々は防寒具も、旅費も、食料も持たずに家族の住む平壤に向かって旅立った。山また山の国境を越えて平壤にたどりつけるなど、とても考えられない。まさに死出の旅路である。

延吉に居残った私は、街の中央を流れる凍りついたハルハト河の橋の上で、夏服のまま一枚の毛布に包まって冷たい光の初日はつひを拝した。私の人生で迎えた一番強烈な元旦の朝である。

真冬の満州延吉、二八の丘（二八捕虜収容所の裏の丘）。私はこの丘で「地獄」を見た。日本人の墓場である。満蒙開拓青少年義勇軍の美名のもとに集められた多くの子供たち。幹部並びに年長者はソ連軍に連れ去られ、残された一四、五歳の子供たちは自分の力で生きてゆかねばならなかった。生きる道を知らない子供たちは餓えと寒さと、疲労のため倒れた。大八車に積まれた裸の死体、ボロボロの麻袋につつまれているのはまだ良い方だ。ほとんどが裸で材木のように積まれていた。その車を引く子供たちのボロボロの衣服、中にはむしろを体に巻きつけている子もいる。倒れた仲間の遺体を埋葬すべく、この丘にやってきた。しかし、満州の大地はカチカチに凍って鉄のように堅く、日本人の埋葬を拒んでいる。冷たい大地に並べられた子供たちの亡骸なきがらは、数日後、野犬に食いちぎられ、異国の丘で野晒しになっていた。名も知らぬ捕

虜仲間の、また生まれたばかりの赤ん坊の亡骸を埋めに、私は何度もこの丘に足を踏み入れた。延吉の街は日本人にとつて、暗く悲しい想い出の多い街である。

私は雪の荒野でレンガ運びなどをして生きてきた。ある吹雪の日、三山酒造所の前でK社長に助けられ、酒麴菌の培養などをして生きてきた。その後吉東保安軍（八路軍）の龍井兵工廠の技術員として、マンドリンというソ連軍の自動小銃の設計図などを描きながら生きのびた。少年のころ製図手として働いていた経験が身を助けたのだ。

昭和二年八月、延吉日本人引揚げが開始され、同年一〇月夢にまでみた懐かしの佐世保港に上陸、シベリアに連行された本隊よりも一年ほど早く、一人で復員したのであった。